

文字使用から見た専修大学本源氏物語「桐壺」(附翻字)

斎藤達哉

はじめに

本稿は、専修大学図書館が所蔵する源氏物語「桐壺」写本 (A/913.3/Mu56・ID:105402556) の位置付けについて、文字使用・文字意識の観点から分析するものである。

当該写本は、為経の奥書及び為秀筆とする極めを有するものであり、中田(一九九五)で「為秀奥書本」として紹介されている。同論考では、詳しい書誌、『源氏物語大成』本文との校異、傍記等(他本をもつて校異を示す箇所、親本と校合した時に加えられたもの、「漢字に振り仮名」を付したもの)、朱筆の「合点」についても紹介されている。本稿では、他の写本との比較を行う都合上、「専修大学本」と呼ぶことにする。

書誌については、中田(一九九五)で詳述されているので、本稿では補足のみを記しておく。まず、本文料紙はすべて金が散らしてある。目視では気づかなかったが、デジタルカメラによる文字の拡大撮影で見出すことができた。本文には、すでに報告されている見せ消ち、傍記に加え、擦消とナゾリとが見出せる。こうした文字訂正の形跡は、文字使用・文字意識の調査の手掛かりとして重要である。

源氏物語では極端な本文の異同が少ないため、細かい系統分類が行いにくい。例えば、伊藤(二〇〇二)では、河内本とそれ以外という分類が妥当であることを述べている。専修大学本は、青表紙本と考えられてきたが、一口に青表紙本と言っても様々な伝本が存在する中のどれに近いのかなどの検討が望まれるところである。本文の異同につい

ては、中田（一九九五）で四四箇所（大きな脱文一箇所を含む）が紹介されているが、これは活字化された二次資料『源氏物語大成』校異篇の本文、校異と、の比較の範囲に留まっている。本稿では、一次資料である伝本間の比較を通して、どのような文字を使用しているのかという「文字使用」の面から専修大学本の位置付けを考察したい。また、書き込み等に見られる文字意識についても言及したい。

専修大学本の文字使用の状況の調査には、翻字テキストデータ（字母の分かる形での翻字）を作成して用いた。この翻字についても、当該写本の様子を知るための資料として本稿末に掲げるものとする。

一、専修大学本の文字使用の状況について

仮名写本における「文字使用」の状況について、本稿では写本全体の文字のうち漢字がどの程度含まれているかという「漢字含有率」及び、写本全体で仮名が何種類使用されているかという「仮名種類数」の二つに注目したい。

集計に先だつては、専修大学本及び比較に用いる伝本の翻字テキストデータを作成した（専修大学本については本稿末尾に掲載）。このデータでは、原則として本行本文を採用した。傍記、傍注、補入等は不採用とし、見せ消ちも消された方の文字を採用した。ただし、ナゾリ、擦消は、上書きされた方の文字を採用している。また、整版本に見られる振り仮名、濁点は無視した。また、奥書等も対象外としている。

仮名の翻字は異体仮名（字母）が分かるものとし、次の①～③の基準に沿ってデータを作成した。

- ① 仮名の同定は、字母に拠る字源主義とする。
- ② 現代の平仮名と同じ字母をもつ仮名は見た目の形にかかわらず、現代の平仮名を用いてデータ化する。

（例）あ・か・x…

3 文字使用から見た専修大学本源氏物語「桐壺」（附翻字）

③ 現代の平仮名と異なる字母をもつ仮名は見た目の形にかかわらず、字母に当たる漢字で表現する。

（例）阿・可・佐：

②③で「見た目の形にかかわらず」としたのは、「同字母異字形」による書き分け（例えば二種類の「と／と」など）が仮にあったとしても区別しないということである。筆で書かれた仮名文字は、筆画の連続性（草化）を持つている。仮に、同字母異字形の仮名の草化の度合いを区別した場合、判断に個人差が生じやすくなる。さらに、写本によつて筆跡が異なるため、汎用性のある判別基準が示しにくいなどの問題が生じる。そこで、仮名の種類は字源（字母）によつて分けることとした。

なお、文字「日」などのように一字一音で使用されるものは、漢字か仮名かの区別に迷う場合がある。この場合は、文脈から判断して表意文字として成り立つ事例であれば漢字として扱った。

また、漢字のデータ化に当たっては、漢字含有率のみを調査することを目的としたので、すべて新字体で入力した。さらに、漢字であることを示す表示を付加した。これは仮名の字母と区別するためである。

上記のテキストデータから専修大学本の文字使用の状況を集計すると、表1のようになる。

「漢字含有率」欄は、「総漢字数」を「総文字数」で割つて算出した数値を百分率で示している。「総文字数」欄は文字（踊り字を含む）の異なりの総数であるが、踊り字の「ゝ」は一文
字、「く」は二文字として機械的に集計している。

表1 専修大学本の文字使用

総文字数	11,373
総漢字数	947
漢字含有率	8.3%
仮名種類数	104

二、文字使用から見た専修大学本の位置

次に、専修大学本の「漢字含有率」「仮名種類数」を、他の伝本の数値と比較したい。

比較に使用する諸本は以下の二〇種で、この中には、写本一七本のほかに、古活字本二種、版本三種を含めている。写本については、それぞれの解題等を参考にしながら書写年代別に分け、鎌倉期書写とされるものは□記号を、室町期または江戸期書写とされるものは◇記号を付した（注1）。また、古活字本は△記号を、版本は○記号を付した。

〔写本〕

鎌倉期

- 各 各筆源氏（『御物 各筆源氏』貴重本刊行会、一九八六年）
- 伏 伏見天皇本（『源氏物語（伏見天皇本）』古典文庫、一九九一年）
- 穗 穗久邇本（『源氏物語』貴重本刊行会、一九七九年）
- 陽 陽明文庫本（『陽明叢書国書篇 源氏物語』思文閣書店、一九七九年）
- 尾 尾州家本（『尾州家河内本 源氏物語』貴重本刊行会、一九七七年）

室町期

- ◇青 書陵部本（『宮内庁書陵部蔵 青表紙本源氏物語』新典社、一九六九年）
- ◇大 大島本（『大島本 源氏物語』角川書店、一九九六年）
- ◇正 大正大本（大正大学図書館蔵）<http://www.tais.ac.jp/lib/article.html>
- ◇総 東大本（東京大学附属総合図書館青洲文庫蔵、請求記号 E23/48）

◇日 日本本（『日本大学蔵 源氏物語』 八木書店、一九九四年）

◇米 米議会本（米国議会図書館アジア部日本課蔵、LC Control No.2008427768）

◇保 保坂本（『保坂本 源氏物語』 おうふう、一九九六年）

◇明 明融本（『源氏物語 明融本』 東海大学出版会、一九九〇年）

◇飯 飯島本（『飯島本 源氏物語』 笠間書院、二〇〇九年）

◇高 高松宮本（『源氏物語 高松宮御蔵河内本』 臨川書店、一九七三年）

江戸期

◇慶 慶應大正徹本（慶應大学三田メディアセンター蔵、請求記号：132X/158/1）

◇研 国文研正徹本（国文学研究資料館蔵、請求記号：キ4/75/11）

〔古活字本〕室町末期～江戸初期

△会 国会図書館古活字本（慶長古活字本、請求記号：WA7/263）

http://rarebookndl.go.jp/pre/servelet/pre_com_menu.jsp

△九 九大古活字本（九州大学附属図書館、請求記号：国文/17F/94）

http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/info/lib/meta_pub/G0000002rare2

〔版本〕江戸期

○首 首書源氏（『首書源氏物語』 和泉書院、一九八〇年）

○湖 湖月抄（『源氏物語湖月抄』、国立国語研究所図書館蔵、請求記号：W67/Ki68）及び（国文学研究資料

館蔵、請求記号：キ4/9/7）<http://www.nijl.ac.jp/~c/ito/kinoshita/>

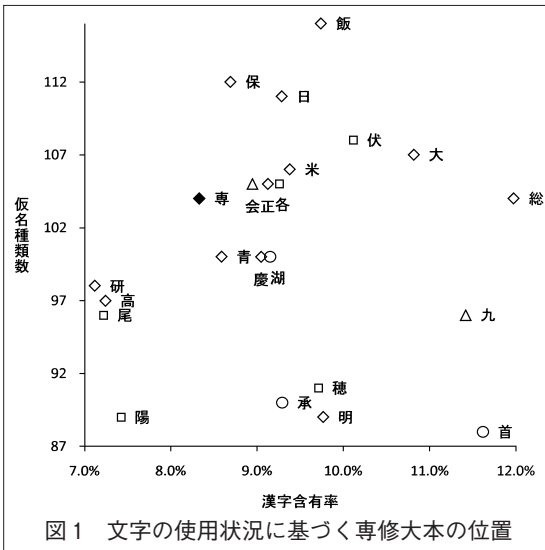
表2 文字使用の比較

伝本	総文字数	総漢字数	漢字含有率	仮名種類数
◆ 専	11373	947	8.3%	104
□ 各	11441	1059	9.2%	105
□ 伏	11143	1127	10.1%	108
□ 穂	11273	1095	9.7%	91
□ 陽	12055	895	7.4%	89
□ 尾	11008	795	7.2%	96
◇ 青	11472	985	8.6%	100
◇ 大	11294	1221	10.8%	107
◇ 正	11347	1035	9.1%	105
◇ 総	10986	1315	12.0%	104
◇ 日	11349	1053	9.3%	111
◇ 米	11938	1119	9.4%	106
◇ 保	11458	995	8.7%	112
◇ 明	11306	1104	9.8%	89
◇ 飯	11546	1124	9.7%	116
◇ 高	11852	858	7.2%	97
◇ 慶	11467	1037	9.0%	100
◇ 研	11708	833	7.1%	98
△ 会	11391	1019	8.9%	105
△ 九	11082	1265	11.4%	96
○ 首	11088	1288	11.6%	88
○ 湖	11367	1040	9.1%	100
○ 承	11335	1053	9.3%	90
平均	11403	1055	9.3%	101

諸本の文字使用の状況を集計すると表2のとおりで、このうち「漢字含有率」と「仮名種類数」を元にして散布図化したものが図1である。

○ 承 承応三年刊絵入源氏物語（米国議会図書館アジア部日本課蔵、LC Control No.2004551302）

<http://leweb4loc.gov/service/asian/asian0001/2005/2005html/20050415toc.html>



【図1】では、◆で示したものが専修大学本である。◆と重なったり接したりするものがないので、今回比較した中には直接関係のありそうな本はない。○や△と重なったり接したりもないので、少なくとも、版本や古活字本をそのまま引き写した写本という可能性は排除できる。

専修大学本は、漢字含有率が比較的低い。書陵部本（青）や保坂本（保）など、似た状況の写本は、ほかにも見られるものの、古態を保存している写本が低い漢字含有率を示す場合もあり、注目される。

仮名種類数は、特に多かつたり少なかつたりということもない。仮名使用の面から見ると、比較的平均的な写本ということになる。平均的であることは、この写本の資料的価値を下げるものではない。桐壺の標準的な仮名使用の有様を伝える資料として位置づけることができよう。

三、書き込みから見える文字意識

これまでは、本行本文での文字使用について検討してきたが、専修大学本には擦消、ナゾリ、見せ消ち、傍記などの校訂が見られる。これらの校訂は、本文書写者が行ったものと、別人が行ったものが混在している。その区別を付けることは容易ではないが、いずれの校訂箇所も、仮名表記が持っていた可読性についての問題点（読みにくさ、誤読しやすさ）を読み取る手掛かりとなる。

以下、（1）仮名の書き換え、（2）字体の異なる仮名による傍記、（3）清濁の区別の傍記、の三点について述べる。

（1）仮名の書き換え

以下に示す①～⑦は、仮名が書き換えられた箇所である。擦消、ナゾリ、見せ消ち、傍記と、方法はまちまちであ

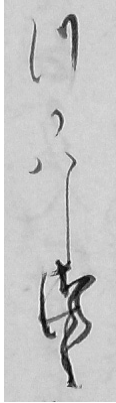
るが、いずれも最初の書写時の書き誤りに起因している。この書き誤りは、親本に書かれている文字を、類似形の別の文字だと誤解したために生じたものと考えられる。

①からは「く」と「く(多)」の類似、②からは「て」と「つ」の類似、③からは「く(多)」と「ち」の類似、④からは「も」と「里」の類似、⑤からは「て」と「そ」の類似、⑥からは「い」と「ひ」の類似、⑦からは「し」と「え」の類似を見ることができ(注2)。

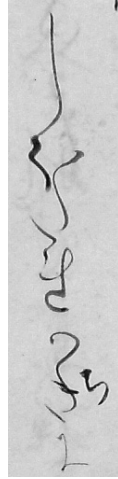
〔擦 消〕① く↓く(多)へ(43ウ・9)



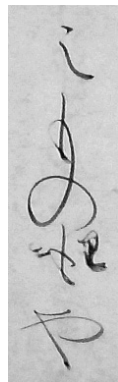
〔ナヅリ〕② て↓つ、↓徒、(13オ・7)



〔見せ消ち〕③ ㇿ(多) ↓ち(20オ・4)



④ も ↓里(20ウ・7)



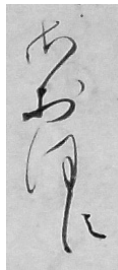
⑤ て ↓そ(37ウ・1)



〔傍記〕⑥ いひ(35オ・5)



⑦ しえ(36ウ・4)



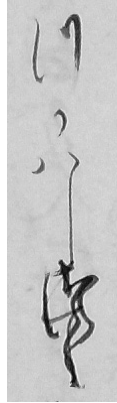
(2) 字体の異なる同音の仮名による傍記

以下に示す②と⑧、⑩は、本行本文に誤りはないところに校訂の跡が見られる箇所である。

これらは、本行に書かれた仮名を誤読しないために行われたものである。換言すれば、本行で書かれた文字の形が似ているために誤読しがちであるということになる。

②は「つ」が「て」と紛れるために「徒」をナゾリ書きする。⑧は「る」が「つ」にも見えるために「ル」を傍記したものと考えられる。同様に、⑨は「布」が「希」にも見えるために「ふ」を傍記したもの、⑩は「つ」が上下に潰れて読みにくいために「徒」を傍記したもの、⑪は「万」が上下に延びすぎているために「ま」を傍記したものと考えられる。

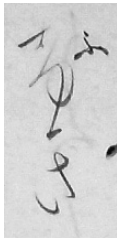
〔ナゾリ〕② て↓つ、↓徒、(13オ・7)



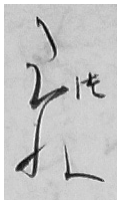
〔傍記〕⑧ る(19ウ・3)



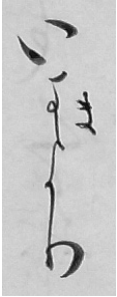
⑨ 布(30オ・6)



⑩ つ(28オ・3)



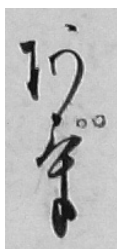
⑪ 万(29オ・8)



(3) 清濁の区別の傍記

⑫は、濁音であることを示すために圈点が付けられたものである。文意に沿うと「アゲオトリ」という語であることが分かるが、仮名文字による書写では、同時に濁点を付けることは困難である。この圈点は、「アケ」(開け、明け)であるのか「アゲ」(揚げ)であるのかが分かりにくかったために、書写後に付加されたものである。濁音であることを傍記することによって、語意の明確化が図られている。

〔濁 点〕⑫ 気⁰⁰(38オ・8)



以上、(1)～(3)で見てきた現象は、仮名表記の可能性についての問題点を知るための資料となっている。

(1)(2)は、類似形の仮名の存在によって生じたものである。仮名の原型である漢字は本来一画一画によって構成されていた。しかし、仮名は本来の画を連続して書くことによって成り立っている文字である。画の連続は、字形の単純化でもあり、結果として、見た目が似た文字を生じさせてしまうことになる。山口(二〇〇六)では、源氏物語に代表される「ひらがな文」は、「漢字カタカナ交じり文」と比べて読みにくいことを指摘している(八四ページ)。その理由としては、仮名が多く漢字が少ないことによって語の切れ目が見えにくいことが挙げられている。しかし、読みにくさの理由は、仮名と仮名との連続だけにあるのではない。字形が似ている仮名があることも、読み

くさの理由の一つとなっている。

(3) は、清濁の区別を付加することによって、同音異義語の確率を下げることになり、結果として文脈に即した語義に辿り着きやすくなっている。源氏物語写本のような仮名写本では、文字に濁点の別を付さないことが一般的である。仮名の書字過程で濁点を記入する行為は、連綿を用いることと馴染まないものである。このため、仮名は清音と濁音を包括した文字となっている。しかし、そのことによって、同音異義語(同・表・記・異・義・語)が多くなってしまう、それも可読性の障害となりがちである。

まとめ

以上、専修大学本「桐壺」の資料性について、文字使用の面から検討してきた。

本行本文について見ると、漢字含有率が比較的低い写本であることが注目される。仮名種類数については、平均的であり、目立った特徴は指摘できない。しかしながら、本行本文に後から施された種々の書き込みは、仮名の可読性についての問題点を知るための手がかりとなりうるものである。

以下、仮名の字母の分かる形での翻字を付して稿を終える。

専修大学図書館蔵 為経奥書本 源氏物語「桐壺」翻字

一、原本

(所 蔵) 専修大学図書館(生田)

(請求記号) A/913・3/Mu56

(I D) 105402556

二、凡例

- 1、仮名は、原則として、字母に当たる漢字によって示した。ツの仮名の「つ」と「川」とは区別した。(表1、表2、図1では「つ」と「川」は同じ種類として集計している。)
- 2、漢字は、【】で囲んで示した。
- 3、以下は、原本の様態に近づけて示した。
 - ア、和歌は、行頭を一字下げて示した。
 - イ、朱合点は、傍線によって示した。
 - ウ、傍記は、本行とせず、右または左側に小書きした。

エ、補入は、本行とせず、行中に。印を示したうえで、右側に小書きした。

オ、見せ消ちは、消された文字を本行とし、左側に印を示した。

カ、なぞりは、後から書かれた文字を本行とし、下の文字は右側に()で囲んで小書きした。

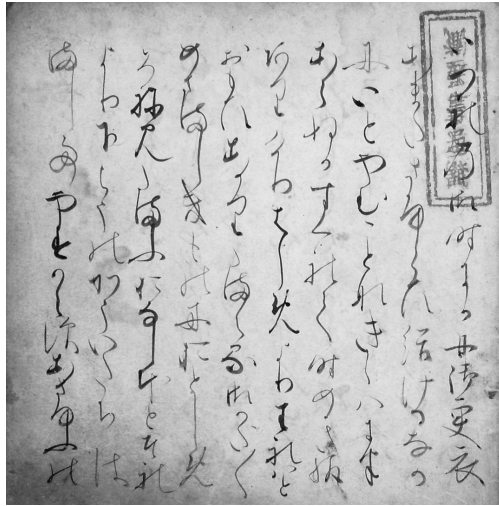
キ、擦消は、後から書かれた文字を本行とし、消された文字は右側に「」で囲んで小書きした。

ク、説明が必要と判断した箇所については、行末にゴチックで注記を示した。

(箱書表)

【為】【秀】【卿】

き李徒本



専修大学本（為経奥書本）源氏物語「桐壺」1丁表
〔原本所蔵：専修大学図書館 複製禁止〕

（題箋）

き里徒本

（1オ）

- 1 いつれの【御】【時】尔可【女】【御】【更】【衣】
 - 2 あま多さ布らひ【給】けるな可
 - 3 丹いとやむこと那き、八尔半
 - 4 あらぬ可すくれて【時】めき【給】
 - 5 阿里个り者し免より王れ八と
 - 6 おもひあ可里多満え累【御】可多く
 - 7 めさ満しきも能丹おとし免
 - 8 そね見多満ふおなし本とそれ
 - 9 より【下】らう能かうい多ちは
 - 10 満し帝や春可ら須あさゆふ能
- （1ウ）
- 1 みや川かへ丹川気ても【人】の
 - 2 【心】をの三つこ可しうら見越おふ
あり気
 - 3 つも里尔やいとあつしくな里
 - 4 ゆきも能【心】本そけ尔さとかち

- 5 なる越いよくあ可春阿者れなる
- 6 も能丹おも本して【人】のそし
- 7 里越もえ者、可らせ【給】者春
- 8 【世】の多めし尔もなりぬへき
- 9 【御】もてなしなりかむ多ちめ
- 10 うへ【人】なともあいなくめ越
- (2才)
- 1 そ者め徒、いと満者ゆき【人】の
- 2 【御】おほえな里も路こし尔も
- 3 閑、累ことのおこり尔こそ【世】も
- 4 み多れあし可りけ連とやうく
- 5 免のし多尔も阿ちき那う
- 6 【人】のもてなや見くさ丹な里て
- 7 【楊】【貴】【妃】の多めし日もきいて川へく
- 8 な里ゆく耳いと者し多なき
- 9 ことおほ可連登か多しけなき
- 10 【御】【心】者えの多くひなき越多の三
- (2ウ)
- 1 尔帝ましらひ多満ふち、の
- 2 【大】【納】【言】半なくなりて八、【北】能
- 3 か多なんい尔しへ能△よしある
- 4 【人】尔ておやよりくしさし
- 5 あ多里てよ能おほえ者那や
- 6 可那る【御】か多く、尔もい多う
- 7 おとら須な尔【事】能きしきをも
- 8 もてなし【給】け連と、里多て、
- 9 者可くしきうし路三し
- 10 なけ連八ことある【時】八な越より
- (3才)
- 1 【所】なく【心】本そけなりさき能
- 2 【世】尔も【御】ちきりや布可、り
- 3 けむ【世】尔なくきよらなる多万
- 4 のおのこみこさへうまれ多まひ
- 5 ぬいつし閑と【心】もとな可らせ【給】て
- 6 いそき万いらせて【御】らむする尔
- 7 めつら可なるちこの【御】か多ちな里

- 8 【二】のみこ八【右】【大】【臣】の【女】【御】の
 【御】八ら
 9 尔てよせをもくう多可ひなき
 10 満うけの【君】と【世】尔もて可しつき
 (3ウ)
 1 きこゆれとこの【御】尔本ひ尔八
 2 ならひ多満ふへくもあらさり
 3 け連八おほ可多能やむことなき
 4 【御】おもひ尔てこの【君】越八わ多
 5 くしも能尔おも本し可し
 6 つき多まふことかきりなし
 7 者しめよりをしなへて能うへ
 8 【宮】川可へし【給】へき、八尔は
 9 あらさりきおほえもいとやむ
 10 こと那く【上】春め可しけ連と
 (4オ)
 1 王里なく満つ者させ【給】あまり尔
 2 さるへき【御】あそひのお里くな尔

- 3 【事】尔もゆへあること能布しく
 4 尔八まつ満うの本らせ【給】ある【時】尔八
 5 おほとこのこも里すくしてや可て
 6 さ布ら八者せ【給】なとあな可ち尔
 7 お万へさら須もてなさせ【給】し
 8 本と丹をのつ可らからきか多にも
 9 みえし越こ能みこう万れ【給】て
 10 のち八いと【心】こと丹おも本し
 (4ウ)
 1 をきて多れ八【坊】尔もようせ
 2 須八このみこの井多まふへ
 3 きなめ里と【一】能三古の【女】【御】八
 4 おほしう多可へ里【人】よりさき尔
 5 まいり多まひてやむことなき
 6 【御】おもひなへてなら須みこ多ち
 7 などもお八しませはこの【御】【方】の
 8 【御】いさ免越の三そ【猶】わつら八しう
 9 【心】くるしうおもひきこえさせ

- 10 多まひける可しこき【御】可けを八
 (5才)
- 1 堂の三きこえなからおとしめ
 2 き春越もと免【給】【人】八おほく
 3 わ可【身】八可よ八くもの者可なき
 4 あ里さ満尔て【中】くなるもの
 5 おもひをそし【給】【御】つ本ね八き里
 6 つ本なりあま多能【御】【方】く越
 7 すきさせ【給】てひまなき【御】
 8 まへわ多り丹【人】の【御】【心】を川くし
 9 【給】もけ尔こと八里とみえ多り
 10 まうの本里【給】尔もあま里
 (5ウ)
- 1 うちしきるお里くく八うち八し
 2 わ多との、古、可しこ能みち尔
 3 あやしきわさ越し徒、
 4 【御】をく里む可えの【人】のきぬ
 5 のすそ堂へ可多くまさなき
- 6 【事】もあ里ま多ある【時】半^ニ
 7 えさらぬめ多う能と越さし
 8 こ免こな多可なた【心】越あ者せて
 9 八し多な免わつら八させ多満ふ
 10 【時】もおほ可里【事】尔ふれて
 (6才)
- 1 か春しら須くるしきこと能見
 2 まされ八いとい多うおもひ王飛
 3 多る越いと、あ者れと【御】らむし帝
 4 【後】【涼】^{ひや}【殿】尔もとさ^よ布らひ多まふ
 5 【更】【衣】能【曹】^サ【司】^ツ越本可尔う川させ
 6 多満日てうへつ本年丹多満八す
 7 そのうれへましてやらむ可多なし
 8 このみこ【三】川尔な里【給】とし
 9 【御】八可まきのこと【二】能【宮】の多て
 10 まつ里し尔おとら須くらつ可さ
 (6ウ)
- 1 おさ免との、も能越徒くし帝

- 2 い三しうせさせ【給】それ耳
- 3 つ気ても【世】能そし里能三
- 4 おほ可連登このみこ能およ
- 5 すけもてお者する【御】か多ち
- 6 【心】者へあり可多くめつらしき
- 7 まてみえ【給】をそね見あえ【給】
- 8 八春【物】の【心】し里【給】【人】八可、
- 9 累【人】も【世】耳いてお者す累
- 10 も能なりけ里登あさ満しき
- (7才)
- 1 まて【目】越おと路かし【給】その
- 2 とし能【夏】三やす【所】者可なき
- 3 【心】ち尔わつらひて万可てなんと
- 4 し【給】をいと満さらにゆるさせ
- 5 【給】者春としこ路つねのあつし
- 6 さ丹な里多満へれ八【御】めなれ
- 7 てな越志八し【心】三よとの三
- 8 の多ま者する丹【目】、尔をも里
- 9 【給】て堂、【五】【六】【目】の本と耳
- 10 いとよ者うなれ八者、【君】なくく
- (7ウ)
- 1 【奏】して満可てさせたてまつり「せ」判読
- 2 多まふか、るお里尔もある満
- 3 しき者ちもこそと【心】つ可ひ
- 4 してみこ越八と、免多て
- 5 まつ里てしのひてそいて【給】
- 6 可きりあ連八さの三えと、免
- 7 させ【給】八す【御】らむし多尔
- 8 をくらぬおほつかなさ越いふ
- 9 か多なくおも本さるいと尔本ひ
- 10 や可尔う川くしけなる【人】の
- (8才)
- 1 い多うおもやせていとあ者れと
- 2 もの越おもひし見な可らこと尔
- 3 いて、もきこえやら須ある可な
- 4 き可尔きえい里つ、ものし【給】を

- 5 【御】らむする尔さし 【方】ゆく春多
 6 おほしめされ春よろ川のこと越
 7 なくくちきりの多万八すれと
 8 【御】いらへもえきこえ多満者春
 9 満見などい多ゆけ尔てい
 10 と、なよくとわれ可のけしき
 (8ウ)
- 1 尔て布し多れ八い可さ満尔と
 2 おほしめし万と八るてくるまの
 3 【宣】【旨】などの多ま者せても
 4 【又】いらせ 【給】てさら^つにえゆる
 5 させ 【給】者す可きりあら無
 6 みち尔もをくれさき多、しと
 7 ちきらせ 【給】けるをさりとも
 8 うちすて、八えゆきやらしと
 9 の多満者する越 【女】もいとい三
 10 しとみ多てまつりて
 (9オ)
- 1 かきりとてわ可る、みち能
 2 閑那しき尔い可満本しき八
 3 いのちな里个りいと可くおもひ
 4 多満へまし可八といきも多え
 5 徒、きこえ満本しけなる 【事】八
 6 あ里けなれといとくるしけに
 7 多ゆ遣なれ八かくな可らとも可くも
 8 ならむ越 【御】らむし者てむと
 9 おほしめ須尔个ふ者しむへき
 10 いの里ともさるへき 【人】くう遣 【給】八
 (9ウ)
- 1 れるこよひよるときこえいそ
 2 可せ八わりなくおも本しな可ら
 3 ま可て佐せ堂まふ 【御】むね
 4 川とふ多可りて川ゆまと路
 5 満連須あ可し可ねさせ多まふ
 6 【御】つ可ひのゆき可ふ本ともなき尔
 7 な越いふせさ越可きりなく

- 8 の多満者せ川る越【夜】【中】うち
- 9 すくる本と丹なん堂え者て
- 10 【給】ぬるとてなきさ者け八
(10オ)
- 1 【御】つ可ひもいとあえなくて可へ里
- 2 まいりぬきこしめ須【御】【心】まとひ
- 3 なる【事】もお本しめしわ可
- 4 連須こも里を八しま須みこ八
- 5 かくてもいと【御】らむせ満本し
- 6 け連【心】かゝる本と尔さ布ら飛【給】
- 7 れいなき【事】なれ八ま可て【給】な
- 8 んとする尔【事】かあらむとも
- 9 おほし多え須さ布ら婦【人】く
- 10 のなきまとひうへも【御】な三多の
(10ウ)
- 1 ひまなくな可れを八しま須を
- 2 あやしとみ多てまつり【給】へ
- 3 累越よろしきことに堂にか、

- 4 るわ可連能可なし可らぬ八なき
- 5 わさなる越ましてあ者れ尔
- 6 いふ可ひなし可きりあれ半
- 7 れいのさ本う尔おさめ多てま
- 8 つる越者、【北】の【方】おなし个ふ
- 9 里尔もの本りなんとなきこ可れ
- 10 【給】て【御】をく里能【女】【房】のくる
(11オ)
- 1 ま丹し多ひの里【給】てお多き
- 2 といふ【所】にいと可めしうそ能
- 3 さ本うし多る尔お八しつき多る
- 4 【心】い可者尔可里可八ありけむ、なし起
- 5 【御】可ら越三累く【心】な越お者する
- 6 ものとおもふ可いと可ひなけ連八
- 7 者ひ尔なり多ま者むを三多て
- 8 まつりていま八なき【人】とひ多
- 9 ふる尔【思】なりなんとさ可しうの多
- 10 まひつれとくる満よりもおちぬ

(11ウ)

- 1 へうまるひ【給】へ八さは【思】つ可
- 2 しと【人】くもてわつらひき
- 3 こゆ【内】より【御】つ可ひあり【三】【位】
- 4 のくら井をくり【給】よし【勅】【使】
- 5 きてそ能【宣】【命】よむなかなか
- 6 しきことな里ける【女】【御】と多尔
- 7 い者せ須な里ぬる可あ可春く
- 8 ちをしようお本さるれ八いま
- 9 飛とき佐三の【位】を多尔とをく
- 10 らせ【給】なり介りこれ尔つ気

(12オ)

- 1 ても尔く三【給】【人】くおほ可里
- 2 ものおもひし里【給】八さ満可多ち
- 3 なと能めて多可里し【事】【心】
- 4 者せのな多ら可尔めやすく尔く
- 5 三可多かりしことなといまそ
- 6 おほしいつるさ満あしき【御】もて

7 なしゆえこそ春けなうそね三

- 8 【給】し閑【人】可ら能あ者れ尔なさけ
- 9 ありし【御】【心】をうへの【女】【房】なども
- 10 こひしのひあへ里なくてそ

(12ウ)

- 1 とはかゝるを里尔やとみえ多里
- 2 者可那く【日】ころすきてのち
- 3 能わさなと尔もこ満可丹
- 4 とふら八者せ【給】本とふるまゝ、尔「八者」ママ
- 5 せむ可多なうかなしうおほ
- 6 さ累、丹【御】か多く能【御】との井
- 7 なとも堂えてし【給】八春た、な三
- 8 多尔日ちてあ可しくらさせ【給】へ八
- 9 み多てま徒る【人】さへ川ゆけき
- 10 あきな里なきあとまで【人】の

(13オ)

- 1 むねあくまし可里ける【人】の【御】
- 2 おほし可なとそ【弘】【徽】【殿】なと尔八

3 な越ゆるしなうの多まひける

4 【二】の【宮】越三多てまつらせ【給】尔も

5 わ可【宮】能【御】こひしさの三おも本し

6 いてつ、志たしき【女】【房】【御】めのと

7 など越川可者し徒、ついであ里さ満越

ナゾリ(て↓つ、↓徒)

8 きこしめ春【野】王き多ちて尔八

9 可丹者多さむきゆふくれの本と

10 つねよりもおほしい川ること

(13ウ)

1 おほくてゆ気ひの【命】【婦】といふ

2 を川可八春ゆふ川くよ能を可しき

3 本と尔い多し多て佐せ【給】て

4 や可てな可免お者します可う

5 やう能をり八。【御】あひなかせせ【給】し【心】こと那るもの、ね

6 可きならし八可那くきこえ

7 い川ること能【葉】も【人】より八こと

8 な里しけ者ひか堂ちのおも

9 可け尔川とそひておほさる、も

10 や三のう徒、尔はな越おとりけ里

(14オ)

1 【命】【婦】かしこ尔満て川きて

2 かと日きいる、よりけ者ひ

3 あ者れな里やも免春見なれと

4 【人】飛とり能【御】かしつき尔と可く

5 川くろひ多て、めやすき【程】【程】尔て

ナゾリ(【拯】↓【程】)

6 すくし【給】【給】へるや見尔くれて布し

7 志つ三【給】へる本と尔【草】も堂可く

8 な里【野】わき尔いと、あれ多る

9 【心】【地】して【月】【影】八可り楚やへむ

10 くら尔もさ八ら春さしい里多る

(14ウ)

1 みな見おもて尔おろして者、

2 【君】もとみ尔えものもの多ま八春

- 3 いま、とと万り【侍】可いとうき越
- 4 かゝる【御】つ可ひのよもき婦の川ゆ
- 5 わ氣い里【給】尔川氣てもいと
- 6 者つ可しうなんとてけ尔え
- 7 多ふ満しくない【給】まいりて八
- 8 いと、【心】くるしう【心】きも、川くる
- 9 やう尔なんと【内】【侍】のすけのそう
- 10 し【給】し越ものおもふ多万へ
(15才)
- 1 しらぬ【心】ち尔もけ尔こそいと
- 2 志のひ可多う【侍】け連とてや、
- 3 堂めらひておほせこと川多へ
- 4 きこゆ志八し八ゆ免可との三
- 5 堂とられし越やうくおもひ
- 6 し徒万る尔しもさむへき
- 7 か多なく堂へ可多き八い可丹
- 8 春へきわさ尔可ととひあ者春
- 9 へき【人】多尔なき越しのひて八
- 10 まいり多まひなんやわ可【宮】の
(15ウ)
- 1 いとおほつ可なくつゆけきな可尔
- 2 すくし【給】も【心】くるしうおほさ
- 3 累、越とくまいり多まへなど
- 4 八可くしうもの多ま者せ
- 5 やら数むせ可へらせ【給】徒、可つ八
- 6 【人】も【心】よ八くみ多てまつらむ
- 7 とおほしつ、まぬ尔しもあら
- 8 ぬ【御】【氣】しきの【心】くるし佐尔
- 9 うけ多ま八里者てぬやう尔て
- 10 なん万可て【侍】ぬるとて【御】ふ三
(16才)
- 1 堂てま徒るめも【見】え【侍】らぬ尔
- 2 かく可しこきおほせ越日可り
- 3 にてなんとてみ【給】本とへ半
- 4 春こしうちまきる、こともやと
- 5 まちすく須【月】【日】尔そへていと

- 6 しのひ可多き八わ里なきわさ丹
- 7 なんい者けなき【人】をい可耳と
- 8 おもひや里つ、もろとも尔者く、
- 9 まぬおほつ可なさ越いまはむ可ふ庭
- 10 しの可多免耳な春らへ帝
- (16ウ)
- 1 も能し多まへなとこ万や可丹
- 2 か、せ【給】へ里
- 3 【宮】木の、つゆ【吹】む春ふ【風】の
- 4 をと尔こそき可もと越おもひ
- 5 こそや連とあ連登えみ多ま
- 6 ひ者て春いのちな可さのいと
- 7 川らう【思】【給】へしらる、尔【松】の
- 8 おも者むこと多尔者川可しう
- 9 【思】【給】へ【侍】れ八も、しきにゆき
- 10 可ひ【侍】らむことはましていと
- (17オ)
- 1 者、可りおほくなんかしこき
- 2 おほせこと越多ひくう遣【給】八り
- 3 な可ら三川可ら八えなん【思】多まへ
- 4 堂徒ましきわ可【宮】八い可耳
- 5 おも本し、累尔可万い里多満
- 6 者むこと越の三なんおほし
- 7 いそくめれ八こと八里尔かなしう
- 8 み多てまつり【侍】なとうちく尔
- 9 【思】多万ふるさ満をそうし【給】へ
- 10 ゆ、しき【事】に【侍】連八かくて
- (17ウ)
- 1 お者し満せもいまくしう
- 2 か多しけなくなんとの堂ま婦
- 3 【宮】八おほとこのも里尔个り
- 4 三多てまつりてく八しう
- 5 【御】あ里さ満もそうし【侍】らま
- 6 本しき越万ちにお八しますら
- 7 む尔【夜】ふけ【侍】へしとてぬ
- 8 いそく、れ万とふ【心】のや三も

- 9 堂へ可多き可多八し越多尔八る
- 10 く八可り尔きこえ満本しう
- (18オ)
- 1 【侍】越わ多くし尔も【心】のと可に
- 2 ま可て多満へ【年】こ路うれしく
- 3 おもた、しき川いて尔て多ち
- 4 よ里【給】しものをかゝる【御】せう
- 5 そこ尔て三多てまつる【返】、
- 6 つ連なきいのち尔も【侍】可那むま
- 7 れし【時】よりおも婦【心】あ里し
- 8 【人】尔て【故】【大】【納】【言】いま八となる
- 9 まて堂、この【人】の三や川可へ
- 10 の本い可なら須とけさせ多てま
- (18ウ)
- 1 つれ【我】なくなりぬとてくち越
- 2 しう【思】く川を累なとかへすく
- 3 いさ免を可連【侍】し可八可く
- 4 しう、しろ三おも婦へき
- 5 【人】もなきましらひ八な可く
- 6 なるへき【事】と【思】【給】へな可ら
- 7 堂、可能ゆいこむ越多可へしと
- 8 八可り尔い多し堂て【侍】しを
- 9 【身】尔あまる満ての【御】【心】さしの
- 10 よろ川尔可多しけなき尔【人】
- (19オ)
- 1 けなき者ち越かくしつ、ま
- 2 しらひ【給】ふめ里。つる題【人】のそね見
- 3 布可く川も里や春可らぬこと
- 4 おほくなりそひ【侍】つる尔よこ
- 5 さ満なるやう尔て川井尔
- 6 かくなりぬれ八可へ里て八つらく
- 7 なんかしこき【御】【心】さし越【思】
- 8 【給】やられ【侍】これもわりなき
- 9 【心】のや三尔なんといひもやらす
- 10 むせ可へり【給】本と尔【夜】も布けぬ
- (19ウ)

- 1 うへもし可なんわ可【御】【心】な可ら
 - 2 あな可ちル【人】めおとろく
 - 3 八可りお本されしもな可、る満ル
 - 4 しきな里け里といま八つら
 - 5 可りける【人】のちき里尔なん
 - 6 【世】ルいさ、可も【人】の【心】をまけ多クる
 - 7 【事】八あらしとおも婦を多、
 - 8 この【人】のゆへ尔てあま多さる
 - 9 ましき【人】のうら見越おひし
 - 10 者てく八可う、ちすてられ帝
- (20才)

- 8 といそさまいる【月】八い里可多
 - 9 のそらルきようす見わ多ルる尔 ナヅリ(尔)の上に「の」
 - 10 かせいとす、しくなりて
- (20ウ)
- 1 く佐むらのむしのごゑく
 - 2 もよ本し可本那るもいと
 - 3 多ち者なれ尔くき【草】能もと
 - 4 な里
 - 5 春、むし能こゑのかきり越
 - 6 徒くしてもな可きよあ可春
 - 7 布るな三多可那えものもやル
 - 8 ら数
 - 9 いと、し具むし能ねしけき
 - 10 あさちふ丹つゆをきそ婦る
- (21才)
- 1 くものうゑ【人】
 - 2 かこともきこえ川へくなん登

- 3 い者せ【給】ふお可しき【御】をく里
 - 4 も能などあるへきお里もあら
 - 5 ね八堂、かの【御】可多み尔とて
 - 6 かゝるようもやとのこし多ま
 - 7 へ里ける【御】さう楚く飛とく多里
 - 8 【御】くしあ気のでうとめくも能
 - 9 そへ【給】ふわ可き【人】くかなしき
 - 10 こと八佐ら尔もい者春【内】わ多りを
- (21ウ)
- 1 あさゆふるならひていとさうく
 - 2 しくうへの【御】あ里さ満など
 - 3 おもひいてきこゆれ八とく
 - 4 まいり多満者んこと越そ、の
 - 5 可しきこゆれとかくいまくしき
 - 6 【身】能そひ多てまつらんも
 - 7 いと【人】き、う可るへし【又】【見】
 - 8 多てまつらて志八しもあらむ八
 - 9 いとうし路め多うおもひきこへ

- 10 多満日て春可くともまいらせ
- (22オ)
- 1 堂て万つり【給】者ぬな里个り
 - 2 【命】【婦】八ま多おほとこのこもらせ
 - 3 【給】八さりける越あ者れ尔み多て
 - 4 まつるおまへのつ本せむさいの
 - 5 いとをもし路きさ可りなる越
 - 6 【御】らむするやう尔てしのひ
 - 7 や可丹【心】尔くき可きり能【女】【房】
 - 8 【四】【五】【人】さ布ら八せ【給】て【御】もの
 - 9 か多りせ佐せ多まふな里个り
 - 10 この古路あ気くれ【御】らむする
- (22ウ)
- 1 【長】【恨】【哥】能【御】ゑ【亭】【子】【院】の
 - 2 【給】ていせつらゆき尔よ万せ
 - 3 【給】へるや万とこと能【葉】越も、ろ
- 【葉】は行中に添書き

4 こしのお多越も堂、楚のすぢ

5 をそ満くらこと尔せ佐せ【給】いと

6 こまや可尔阿里さ満と者せ【給】

7 ふあ者れな里川る【事】志のひ

8 や可にそう春【御】返【御】らむすれ八

9 いとも可しこきをハきとシころも 【ひ】を擦消して「き」

10 【侍】ら須か、るおほせことにつ気ても

(23オ)

1 かきくら須三多り【心】地【地】尔なん

2 あらき可せ布せきし可け能

3 可れしよりこ者き可うゑ楚

4 し津【心】なきなとやう尔三多り

5 可八しき越【心】おさ免さりける

6 おと、【御】らむしゆる春へし

7 いかうしも【見】えしとおほ志

8 しつむ連登佐ら尔えしのひ

9 あえ佐せ【給】八春【御】らむし八志

10 めし【年】【月】の【事】佐へかきあつ免

(23ウ)

1 よろ川尔おほしつ、けられて

2 【時】のまもおほつ可なりし越

3 かくても【月】【日】はへ尔个りと

4 あさ満しうおほしめさる【故】

5 【大】納【言】のゆいこんあやま多春

6 【宮】つ可え能本い布可くものし

7 多里しよろこひ八可ひあ累

8 さ満尔とこそ【思】わ多りつ連いふ

9 可ひなしやとうちの多ま八せて

10 いとあ者れ尔おほしやるかくても

(24オ)

1 をのつ可らわ可【宮】などおひいて

2 多満者、佐るへき川いてもあり

3 なんいのちな可くとこそ【思】ねん

4 せめなどの多満者須かのをく里

5 【物】御【御】らむせさ春なき【人】のす三可

6 多つねいて多りけむ志るし能かむ

- 7 さしならまし可八とおほすも
 8 いと可ひなし
 9 堂つね【行】ま本ろしも可那つて
 10 尔ても多満のあり可をそことしるへく
 (24ウ)
 1 系尔可ける【楊】【貴】【妃】の可多ちは
 2 い三しき系しといへとも布て
 3 可きりあり个れ八いと尔本ひすく
 4 なし【大】【液】【芙】【蓉】【未】【央】【柳】も
 5 けるかよひ多里し可多ちを可ら
 6 めい多るよそひ八うるわしう
 7 こそありけ免な川可しう羅う
 8 多遣な里し越おほしい徒る尔
 9 【花】【鳥】のいろ尔もね尔もよそふ
 10 へき【方】そなきあさゆふのことく
 (25オ)
 1 さ丹者ね越ならへ【枝】をか者さむと
 2 ちきらせ【給】し丹かな八さりける

- 3 いのち能本とそつきせ須うらめ
 4 しき【風】の本とむし能ね耳
 5 つ気てもの、見かなしうおほ
 6 さる、丹【弘】【徽】【殿】尔八飛さしう
 7 う系の【御】つ本ね尔もまうの本り
 8 多満者須【月】のおもしろき尔
 9 【夜】ふ具るまであそひをそし
 10 【給】なるいと春さ満しうものうしと
 (25ウ)
 1 きこしめ須こ能ころの【御】【気】し
 2 き越み多てま徒るうへ【人】【女】【房】
 3 などは可多八らい多しとき、
 4 个りいと越し多ち可とくしき
 5 【所】ものし【給】ふ【御】【方】尔て【事】尔も
 6 あら須おほしけちてもてなし
 7 多まふなるへし【月】もい里ぬ
 8 【雲】のうゑもな三多尔くる、【秋】
 9 の【月】い可て春むら無あさちふの

10 やとおほしめしや里徒、とも

(26才)

1 し【火】をか、け川くしておき

2 お者しま須【右】【近】能徒可さの

3 との井【申】のこゑきこゆる半

4 うし丹な里ぬるなるへし

5 【人】め越もおほしてよるのおと、尔

6 いらせ【給】てもまと路ませ多まふ

7 こと可多しあし多尔おきさせ

8 【給】とてもあくるもしらて登

9 おほしい川る尔もな越あさまつ

10 里ことはをこ多らせ【給】日ぬへ可め里

(26ウ)

1 【物】なときこしめさすあさ可

2 れ日の个しき八可り布れさせ【給】

3 て【大】【正】^{【正】}のおものなとはいと著る

4 可丹おほしめし多れ八者いせん尔

5 さ布ら婦開きり八【心】くるしき

6 【御】个しき越み多てまつりなけく

7 春へてちからさ布ら婦可きり八

8 おとこ【女】いとわ里なきわさ可なと

9 いひあ者せ徒、なけくさるへき

10 ちきりこそ八お八しましけめ

(27才)

1 そこの【人】能そし里うら三越も

2 者、可らせ【給】八春この【御】【事】耳

3 布れ多ること越八堂う里越も

4 おも本しすてたるやう尔な里

5 【行】八いと堂いくしきわさな里と

6 【人】のみ可との多めし万てひき

7 いてさ、めきなけき介り【月】【日】

8 へてわ可【宮】まいり【給】ぬいと、

9 この【世】の【物】なら須きよら可尔およ

10 春け【給】へ連八いとゆ、しう

(27ウ)

3行目と4行目の間に脱文あり

- 1 おほし多里あくるとしの【春】【坊】
- 2 さ多まり【給】尔もいとひきこさ満
- 3 本しうおほせと【御】うしろ【見】すへ
- 4 き【人】もなく【又】【世】のうけ日くまし
(28ウ)
- 5 きこと【也】个れ八な可くあやうく
- 6 おほし八、可りていろ尔もい多
- 7 佐せ【給】者春なりぬる越さ八可り
- 8 おほし多れとかきりこそあり
- 9 个れと【世】【人】もきこえ【女】【御】も【御】
- 10 【心】ちおち井【給】日ぬかの【御】を半
(28オ)
- 1 【北】の【方】なくさむ可多なくおほし
- 2 志徒見てお者すらむ【所】尔堂尔
- 3 多つねゆ可むとね可ひ堂まひし
- 4 志るし尔や川る尔うせ【給】日ぬ連八
- 5 【又】これをかなしひおほ春【事】
- 6 可きりなしみこむ川尔な里【給】
- 7 としなれ八この多ひ八おほし、
- 8 里てこひなき多まふところ
- 9 なれむつひきこえ【給】へるを三多て
- 10 万川里をく可なしひをなん
(28ウ)
- 1 【返】、の多まひけるいまは【内】尔
- 2 の三さ布らひ堂まふな、川丹
- 3 なり【給】へ八布見者しめなど
- 4 せさせ【給】て【世】にしら須さとう
- 5 かしこくお者春れ八あまり
- 6 おそ路しき万て【御】らむ春いま八
- 7 多れもくえ尔く見【給】者し八、
- 8 き見なくて堂尔らう多うし
- 9 【給】へとて【弘】【徽】【殿】などにもわ多らせ
- 10 【給】【御】とも尔八や可てみ春のうち尔
(29オ)
- 1 いれ多てまつり【給】い三しきもの、
- 2 婦あ多可多きなりとも三て八
- 3 うちえ満れぬへきさ満のし【給】

- 4 へれ八えさし者なち【給】八春【女】みこ
 5 多ち布多【所】この【御】八ら尔を八し
 6 ませとなすらひ【給】へき多尔楚
 7 な可りける【御】【方】くもかくれ【給】
 8 者春い万まよりな万め可しう者つ
 9 可しけ尔お者春れ八いとお可しう
 10 うちとけぬあそひくさに多れもく
 (29ウ)
- 1 おもひきこえ【給】へ里わさと能【御】
 2 可くもむ八さる【物】尔てことふゑの
 3 ね尔もくも【井】越日、可し春へて
 4 いひつ、け八ことくしう、多て
 5 そな里ぬへき【人】の【御】さ満なり
 6 けるそ能ころこまうとのまいれ
 7 累な可尔可しこきさう尔ゑむ
 8 ありける越きこしめして【宮】の
 9 うち尔めさむこと八【宇】【多】能三可との
 10 【御】いましめあ連八い三しう志の
- (30オ)
- 1 ひてこの三こ越こころくわん尔
 2 川可八し多り【御】うしろ三多ちて
 3 つ可う万つる【右】【大】【弁】の【子】のやう尔
 4 おも者せてゐて多てまつる耳
 5 【相】【人】おとろきてあま多、ひ可多
 6 布ふきあやしゑふく尔のおやと
 7 な里て【帝】【王】のか三なきくらゐ尔
 8 の本るへきさうにお八しま須【人】の
 9 そな多尔て三れ八三多れうれふる
 10 【事】やあらむお本や気のか多めと
 (30ウ)
- 1 な里て【天】【下】越多春くる【方】尔て
 2 三れ八ま多そ能さう多可ふへし
 3 といふ【弁】もいとさえかしこき
 4 者可せ尔ていひ可八し多ること、
 5 もなんいとけうありけるふ三
 6 など川く里可八して个ふあ春

- 7 可へ里さりなんとする尔かくあり
 - 8 か多き【人】尔多いむし多るよろ
 - 9 こひ可へ里て八可なし可るへき
 - 10 【心】者へ越おも新ろく川く里多る
- (31オ)
- 1 尔みこもいとあ者れなる【句】越川
 - 2 く里多満へる越可きりなうめて
 - 3 多てまつりてい三しきをく里
 - 4 【物】とも越さ、け多てまつるおほや
 - 5 けよりもおほくの【物】多ま者須
 - 6 をのつ可らこと日ろこ里でもら
 - 7 佐せ【給】八ねと【春】【宮】のおほちおと、
 - 8 なとい可なる【事】尔可登おほし
 - 9 う多可ひてなんありけるみ可と
 - 10 かしこき【御】【心】尔やまとさう越
- (31ウ)
- 1 おほせておほしより尔けるすち
 - 2 なれ八いまゝてこの【君】越みこ尔も

- 3 なさせ【給】八さりける越【相】【人】半
 - 4 万ことに可しこ可里介りとお本
 - 5 し帝【無】【品】の【親】【王】の【外】^{けさく}【尺】^{セキ}【能
 - 6 よせなき尔て八堂、よ八さし
 - 7 わ可【御】【世】もいとさ多めなき越堂、
 - 8 【人】尔ておほや気能【御】うしろ三を
 - 9 するなんゆくさきも多のものし
 - 10 遣なる【事】とおほし佐ためて
- (32オ)
- 1 いよくみちくのさえ越那ら八させ
 - 2 【給】きはことに可しこくて堂、
 - 3 【人】尔八いとあ多らし介れとみこ登
 - 4 なり多まひな八【世】のう多可ひ【思】
 - 5 【給】ぬへくものし【給】へ八すくえうの
 - 6 かしこきみちの【人】耳可む可へ
 - 7 佐せ【給】尔もおなしさ満尔【申】せ八
 - 8 【源】【氏】尔なし多てま川るへく
 - 9 おほしをきて多りとし【月】尔

10 そへて【御】【息】【所】の【御】こと越おほし

(32ウ)

1 わ春る、おりなしくさむやと

2 さるへき【人】くまいらせ多満へ登

3 な春らひ尔おほさる、多にいと

4 可多き【世】可那とうとましよう

5 の三よろ川尔おほしなりぬる尔

6 【先】【帝】能【四】の【宮】の【御】可多ちすくれ

7 多満へるきこえ多可くお八しま須

8 者、【后】【世】尔なくかしつき、こえ

9 堂ま婦をうへ尔さふら婦【内】【侍】の

10 すけ八【先】【帝】能【御】ときの【人】尔て

(33オ)

1 かの三や尔もし多しうまいり

2 なれ多り个れ八い者けなくお八し

3 まし、【時】より三多てまつりいまも

4 本の三多てまつりてうせ【給】尔し

5 三やす【所】の【御】可多ち尔多まへ

6 累【人】を【三】【代】のみや川可え耳

7 つ多者里ぬる尔もみ多てまつり

8 川気ぬをきさいの【宮】能日め【君】こそ

9 いとようおほえておひいてさせ【給】

10 へ里个れあり可多き【御】か多ち【人】尔

(33ウ)

1 なんとそうしける尔満ことや尔と

2 【御】【心】とまりてねんころ尔きこえ

3 させ【給】个り者、きさきあなおそろ

4 しゃ【春】【宮】の【女】【御】のいとさ可なく

5 てきりつ本の可うい能あら八尔八可

6 なくもてなされ尔し多めしも

7 ゆ、しうとおほしつ、三て春可く

8 しうもおほし多、さりける【程】二

9 【后】もうせ【給】日ぬ【心】本そきさ満尔て

10 お者しま春尔多、わ可【女】みこ多ちの

(34オ)

- 1 お那しつらに【思】きこえんといとね
- 2 むころ尔きこえさせ【給】さ布ら婦
- 3 【人】く【御】うしろ三多ち【御】せうと能
- 4 【兵】【部】【卿】のみこなと可く【心】本そくて
- 5 を八しまさむより八うちす見をさ
- 6 せ【給】て【御】【心】もなくさむへくなど
- 7 おほしな里て万いらせ多て
- 8 まつり【給】へ里布ち徒本ときこゆ
- 9 け尔【御】可多ちあ里さ満あやしき
- 10 まてそおほえ【給】へるこれ八【人】の
(34ウ)
- 1 【御】きはま佐里ておもひなし
- 2 めて多く【人】もえおとしめきこえ
- 3 【給】者ね八うけ者里てあ可ぬ【事】
- 4 なし可れ八【人】のゆるしきこえ
- 5 さりし【御】【心】さしのあや尔くなり
- 6 しそ可しおほし万きるとは
- 7 なけ連とをのつ可ら【御】【心】う徒ろ
- 8 ひ亭こよなうおほしなくさむ
- 9 やうなるもあ者れなるわさな里
- 10 【源】【氏】のき見八【御】あ多りさり【給】八ぬ
(35オ)
- 1 をましてしけくわ多らせ【給】【御】
- 2 【方】八え者ちあへ多ま者須いつれの
- 3 【御】可多も【我】【人】尔おとらむとおほい
- 4 多るや八あるとりく尔いとめて多
- 5 け連登うちをとない【給】へる耳^ひ
- 6 いとわ可うう徒くしけ尔てせち尔
「うう」は「う宇」と書く
- 7 可くれ多満へとをの徒可らも里
- 8 み多てまつる者、三や春【所】もか
- 9 気多におほえ多ま者ぬをいとらう
- 10 尔多まへ里と【内】【侍】のすけのきこえ
(35ウ)
- 1 ける越わ可き【御】【心】ちにいとあ者れと

- 2 【思】きこえ【給】てつね八まいらま本し
- 3 くなつさひ三多てまつら八やと
- 4 おほえ【給】うへもかきりなき【御】おもひ
- 5 とち尔てなうと三【給】そあやしく
- 6 よそへきこえ川へき【心】ちなん
- 7 するなめしとおほさてらう多く
- 8 し【給】へつらつき満見などは
- 9 いとよう尔多りしゆへ可よひ
- 10 てみえ【給】も尔けな可ら須なん
(36才)
- 1 なときこえつ氣【給】へれ八おさな
- 2 【心】【地】尔も八可なき者那もみち尔
- 3 川氣て母【心】さし越みえ堂て
- 4 ま川る古よなう【心】よせきこえ【給】
- 5 へれ八【弘】【徽】【殿】【女】【御】【又】この
【宮】とも
- 6 【御】な可そ八くしきゆへうちそへて
- 7 【本】よりの尔くさも堂ちいて、

- 8 ものしとおほし多ち【世】尔多く
- 9 ひなしと三多てまつり【給】日な多
- 10 可うお者する【宮】の【御】可多ち尔もな越
(36ウ)
- 1 尔本八しさは多とへん可多なく
- 2 う川くしけなる越【世】の【人】日可_世
- 3 累【君】ときこゆふちつ本ならひ
- 4 【給】て【御】おほしとりく_えなれ八か、
- 5 やく【日】能【宮】ときこゆこの【君】の
- 6 【御】わら八春可多いと可へまうく
- 7 おほせ登【十】【二】尔て【御】【元】【服】し多
- 8 まふゐたちお本しいな_と三てかき
- 9 里_五ある【事】尔こと越そへ佐せ【給】
- 10 飛と、せの【春】【宮】能【御】【元】【服】【南】
【殿】尔て
(37才)
- 1 ありしきしきよそ本し可里
- 2 【御】日、き尔おと佐せ【給】八す【所】くの

- 3 きやうなるくら川可さ【四】くさうめん【三】
 - 4 などおほや氣【事】尔川可うまつ連る
 - 5 おろ可なることもそと、里ヨラわき
 - 6 おほせことあ里てきよらヨラを川く
 - 7 してつ可うまつれ里お八し
 - 8 ま春【殿】の日む可し能飛さし日む
 - 9 可しむき【御】尔いし多て、くわん【座】さの
 - 10 【御】【座】日きいれの【大】【臣】の【御】さ
- (37ウ)
- 1 ありさるの【時】尔て【源】【氏】まいり【給】
 - 2 三つらゆひ多まへる川らつき可本
 - 3 の尔本ひさ満可へ多万者む【事】
 - 4 おしけ【也】【大】【蔵】【卿】くら【五】ひと川可う
 - 5 まつるいとさよらなる【御】くし越
 - 6 そく本と【心】くるしけなる越うへ八
 - 7 三やすところ能三まし可八とおほ
 - 8 しい川る尔多へ可多き越【心】川よく

- 9 ねんし閑へさせ【給】可う布りし
 - 10 【給】て【御】や春見【所】尔満可て多満日て
- (38オ)
- 1 【御】そ多てまつり可へてお里て者い
 - 2 し多てまつり【給】さ満尔三那
 - 3 【人】な三多おとし【給】み可と八多満し帝
 - 4 えしのひあへ【給】者須おほし
 - 5 満きる、お里もあ里川るむ可しの
 - 6 こと、里【返】し可なくおほ
 - 7 さるいと可うきひわなる本と八
 - 8 阿00氣越とりやとう多可八しく
 - 9 おほされ徒る越あさ満しう、
 - 10 川くしけさそひ【給】へりひき
- (38ウ)
- 1 いれの【大】【臣】のみこ者ら尔多、ひと
 - 2 里可しつき【給】おほむ【女】【春】【宮】よりも
 - 3 【御】个しきある越おほしわつら婦
 - 4 【事】あ里ける【八】このき三尔多て

- 5 まつらむの【御】【心】な里介り【内】尔も
 6 【御】【氣】しきたま八らせ【給】へ里け
 7 連八さらはこのおり能うしろ三
 8 な可める越そひふし尔もともよ
 9 本させ【給】个れ八さおほし多里
 10 さ布らひ尔満可て【給】て【人】くおほ
 (39オ)
- 1 みきなとまいる本とみこ堂ちの
 2 【御】【座】の春ゑ尔【源】【氏】川き【給】へり
 3 おと、个しき者三きこえ【給】【事】
 4 あれと【物】のつ、ましき【程】尔て
 5 とも可くもあへしらひきこえ【給】
 6 者須お万へより【内】【侍】せむし
 7 う遣【給】八里徒多へておと、
 8 まいり【給】へきめしあ連八まいり【給】
 9 【御】程ろくの【物】うへの【命】【婦】とりて
 10 多まふしろきおほうちき耳
 (39ウ)
- 1 【御】そひとく多りれいの【事】【也】
 2 【御】さ可川きの川いて丹
 3 いときなき者川もとゆひ耳
 4 な可き【世】越ちきる【心】はむすひ
 5 こめ徒や
 6 【御】【心】者えあ里ておとろかさせ【給】
 7 無春ひ徒る【心】も布可きもと
 8 ゆひ耳こきむらさきの【色】し
 9 あせ須八とろうしてな可八し
 10 よりお里て布多うし【給】
 (40オ)
- 1 日多り能川可さの【御】むまくら【人】
 2 【所】の多可春ゑて堂ま八里【給】
 3 三者しのもとにみこたち可むたち
 4 め川らねてろくともしなく
 5 尔多万八里【給】所能【目】のお万への
 6 おりひ川ものこも能なと【右】【大】【弁】
 7 なんう遣多ま八里て川可うまつら

- 8 せ遣るとん【世】しきろくの可らひ川
- 9 など【所】せきまで【春】【宮】【御】【元】【服】
の
- 10 を里にも可春まされ里な可く
- (40ウ)
- 1 可きりもなくい可めしうなむ
- 2 所能【夜】おと、能【御】さに【源】【氏】
- 3 の【君】満可てさせ多まふさ本う
- 4 【世】尔めつらしきまてもて可し
- 5 つき、こえ【給】へりいときひ者
- 6 尔てお八し多る越ゆ、しう
- 7 う川しくと【思】きこえ多満えり
- 8 【女】き見八すこし春くし【給】へる
- 9 本と尔いとわ可うお者春れ八尔け
- 10 なく者つ可しとおほい多り
- (41オ)
- 1 このおと、の【御】おほえいとやむ
- 2 ことなき尔者、【宮】【内】の日と徒
- 3 きさい者らになむお八し介れ八
- 4 い徒可多尔つ気てもいと者那
- 5 や可なる尔こ能【君】さへ可くお八し
- 6 そひぬれ八【春】【宮】の【御】おほち尔て
- 7 川井尔【世】【中】越し里【給】へき
- 8 【右】のおと、の【御】いきをひ八【物】尔も
- 9 あら須をされ【給】へ里【御】こと母あま多
- 10 八らく尔ものし【給】【宮】の【御】八らは
- (41ウ)
- 1 【蔵】【人】【少】【将】尔ていとわ可うお可し
- 2 き越【右】のおと、の【御】な可八いと
- 3 よ可らねと見えくし【給】者て
- 4 可しつき【給】【四】の【君】尔あ者勢
- 5 【給】へりおとら須もて可しつき
- 6 多るはあら満本しき【御】あ者ひ
- 7 とも尔なん【源】【氏】の【君】八うへの
- 8 つね尔めしまつ者せは【心】や春く
- 9 【御】さとす三もえし【給】八す【心】

10 のうち尔八多、布ちつ本の

(42才)

1 【御】あ里さ満越堂くひなしと

2 【思】きこえてさやうならむ【人】を

3 こそみめ尔る【人】なくもお八し

4 ける可なおほいと、き三いと

5 をか^{氣に}しう可しつ可れ多る【人】と八

6 三ゆれと【心】尔もつ可春おほえ【給】て

7 おさ那き本との【心】日と徒尔可、

8 里ていとくるしきまで楚

9 お者しけるおとな尔なり【給】て

10 のち八あ里しやう尔み春の

(42ウ)

1 うち尔もいれ多ま八須【御】あそひ

2 のお里くこと布えのね耳

3 きこえかよひ本の可なる【御】こゑを

4 なく佐免耳て【内】す三の見この

5 ましうおほし【給】【五】【六】【日】さ布ら

6 ひ【給】ておほいとの尔【二】【三】【日】など

7 多えく爾ま可て【給】へと多、いま八

8 おさなき【御】本と尔川三なくおほ

9 しなしていと那三可しつき

10 きこえ【給】【御】【方】くの【人】く【世】

【中】

(43才)

1 尔をしなへ多らぬをえ里と、

2 のへ春くりてさ布ら八せ【給】【御】

3 【心】尔川くへき【御】あそひをし

4 お本那くおほしい多川く

5 【内】尔八もとのしけいさ越【御】さう

6 し尔帝者、三や春【所】の【御】【方】

7 の【人】くま可てちら須さ布ら八

8 せ【給】さとの【殿】八すりしき多く三

9 川可さ尔【宣】【旨】く多りてになう

10 あら多免つくらせ多まふもとの

(43ウ)

1 古多ち【山】の多、すまひおもし路

(45才)

2 き【所】なりける越【池】のこ、ろ日ろ

【此本者入道中納言定家卿】

3 くしなしてめて多く川く里

【研授衆本琢磨之書也】

4 の、しるかゝる【所】尔おもふやう

【已可云証本更莫免外見】

5 ならむ【人】とすへて春ま者や

【嘉禎第二之曆借給之書写】

6 との三なけ可しうおほしわ多る

【朱点如本写之而已】

7 ひ可るき三といふ【名】八こ満うと

【諫議大夫為経】

8 のめてきこえて川氣多てまつ

(45ウ)

9 里けるとそいひつ多へ多ると「く」を擦消して「多へ」

【引入事】■文字を擦消して「事」。消された文字は判読不能

(44才)

《白紙》

【天皇御平敷御座有御引】

【入之事】【天放大臣】
【奉仕云】

(44ウ)

この満き能【一】の【名】つ本せむ

(46才)

さい【或本分奥端有此名】

《白紙》

【謬説也 一卷之二名也】

(46ウ)

《白紙》

(47才)

【這一卷為秀卿芳】

【筆也六十帖之】

【卷頭努莫輕写】

【特進藤(花押)】

（注1） 室町末期または江戸初期という推定が成されているものも多い。そのため、記号は室町期と江戸期を区別せずに同じ◇印とした。

（注2） 類似形の仮名を書き誤る事例は、専修大学本に限ったことではない。例えば、擦消による書き直しが多く見られる米議会本の調査では、「う↓そ」「き↓遣」「き↓ま」「寿↓堂」「せ↓を」「△（多）↓う」「と↓盤」「と↓者」「越↓起」といった誤写と訂正が見られた。詳細は、斎藤ほか（二〇一一）に記した。

参考文献

伊藤鉄也（二〇〇二）『源氏物語本文の研究』、おうふう

斎藤達哉・神田久義・豊島秀範・菅原郁子（二〇一一）「米国議会図書館蔵『源氏物語』擦消一覽（桐壺↪藤裏葉）」『平成二十二年 人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査」報告書 米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻 桐壺↪藤裏葉』、国立国語研究所

中田武司（一九九五）「為経奥書本 源氏物語「桐壺卷」に就いての考察」『専修国文』第五七号、専修大学国語国文学会

山口仲美（二〇〇六）『日本語の歴史』（岩波文庫）、岩波書店

付記 本稿は、科学研究費補助金・基盤研究（A）「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究」（国文学研究資料館・代表者…今西祐一郎）の研究成果である。人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査」（代表者…高田智和）、及び国立国語研究所共同研究プロジェクト（C）「仮名写本による文字・表記の史的研究」（平成二二年度・代表者…斎藤達哉）の研究成果も使用した。原本写真及び翻刻の掲載に当たっては、専修大学図書館の許可（平成二三年四月一三日付）を得た。